

調査研究の目的

学習指導要領で求められている資質・能力の育成を目指し、各学校では、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の観点から、学習活動の充実の方向性を改めて捉え直し、これらを一体的に充実させながら授業改善を図る取組が始まっています。

例えば、小学校4年生の音楽の授業では、子どもたちが、「こんな感じの祭りばやしにしたい」と思いや願いをもち、旋律づくりに没頭していました(図1)。

教師は、端末の楽譜アプリを用意して入力した音楽を再生できるようにしたり、五線譜を準備して手書きで旋律をつくり、つくった旋律を楽器で再現できるようにしたり、子どもが自分にとって最適な方法で音楽づくりをしていくことができるように準備していました。また、子どもが、音の上がり下がり、反復などによる旋律のつなげ方に気付いたり、音楽を形づくっている要素の変化によるよさや面白さを把握したりできるよう支援していました。さらに個々の気付きの意味を全員で比較・検討する場面を設けて、協働しながら学びを深くしていくことができるような支援を計画していました。

このように個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させていくために、私たち教師は、普段どのように思考・判断して授業づくりをしているのかを把握するため、本テーマを設定して調査研究を行いました。



図1

音階から音を選び、旋律をつくる端末のワークシートを使うM児

調査研究の内容

(1) 学習活動の充実の方向性を、学習者視点から捉え直す

○個別最適な学びとは、教師視点から整理した「指導の個別化」と、「学習の個性化」を、学習者視点から整理した概念のこと。

「指導の個別化」(教師が効果的な指導を実現することや、子供一人一人の特性や学習進度、学習到達度等に応じ、指導方法・教材や学習時間等の柔軟な提供・設定を行うこと)

「学習の個性化」(教師が子供一人一人に応じた学習活動や、学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、子供自身が、学習が最適となるよう調整すること)

中央教育審議会答申(令和3年1月)には、上記のような記載が見られます。注目したいのは、今まで「教師視点から整理していたものを、学習者視点で捉え直す」というところです。

もとより承知のことであり、踏まえて実践している私たちですが、普段の授業づくりにおいては、とすると、図2のように、教師を主語に考えてしまうことがあります。その時の、手だてや支援の表現を見ると、指示や使役が並んでいることがあります。形成的な評価の内容が抽象的になったり、あいまいになったりすることもありそうです。

しかし、改めて子どもを主語にしてみると、同じ授業づくりでも、図3のように、驚きや感動を含む子どもの様々な受け止め方や、多様な思いや願い・問い、多様な追究(追求)の姿を、たくさん予想することができるのではないでしょう。

何も難しいことではありません。視点を教師から学習者に変えただけですが、答申ではその

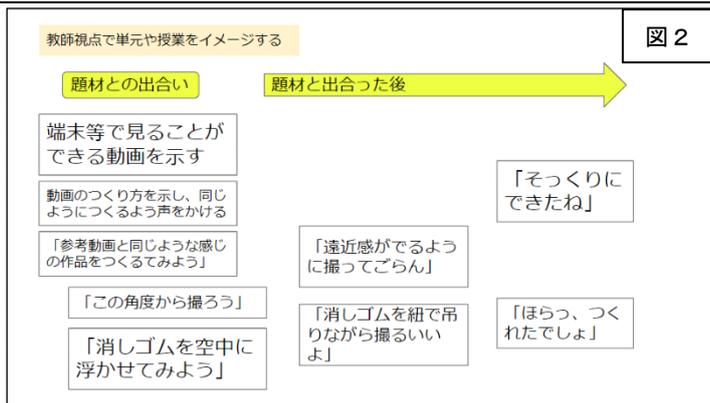


図2

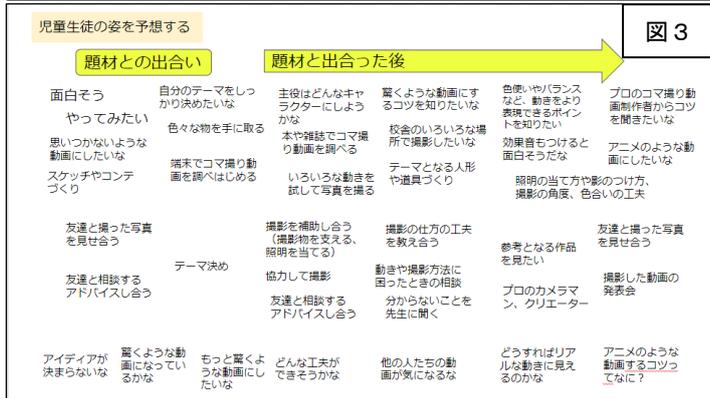


図3

ことの大切さを明言し、私たち教師に、改めてその実践を促していると考えます。

## (2) 予想した子どもの姿を基に、子どもの授業に取り組む意識の流れを考える

視点を学習者に変えることは、授業改善に向けた個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実のための重要な要素ですが、必要十分条件ではありません。

学習者の視点で検討した図3のような資料を基に、養う資質・能力を加味しながら、授業や単元の全体像を把握することも必要です。

例えば、図3で予想した子どもの姿を、図4のように整理してみます。個々の子どもの意識、他者との関わりが生まれそうな意識、悩みや不安・課題意識などに分類してみると、子どもの意識の流れが見えてくることがあります。

興味や関心をもって個別に学習に取り組む(1A)→個や小さなグループで問いや悩みをもち(1B)→協働での学習で解決したり、深めたり(1C)する場面や学習形態が見えてきます。そのサイクルが単元の中で連続することも見えてきます(2A)。

子どもの意識の流れを踏まえるからこそ、個別での学習を充実させるのはどこか、協働して学習することで深めるのはどこかが、具体的なイメージを伴って明らかになりそうです。

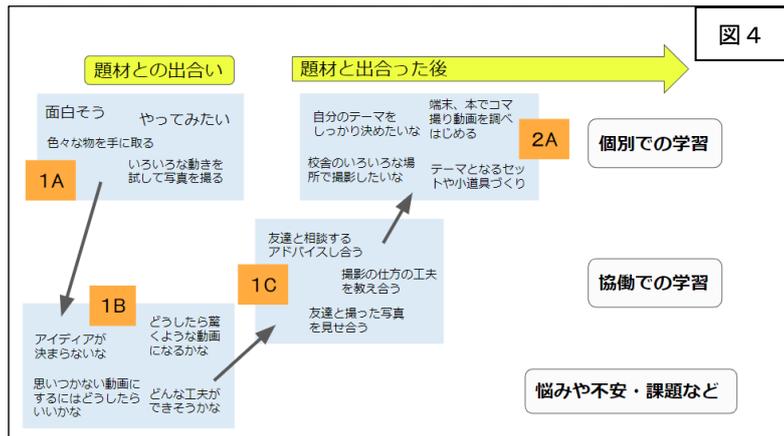


図4

## (3) 子どもの授業に取り組む意識の流れを踏まえて、教師視点の手だてを組み入れる

図4で把握した、子どもの授業に取り組む意識の流れを探究のサイクルに乗せて表現したものが図5です。個別最適な学びが充実するところはどこか、協働的な学びが充実するところはどこかが明確になっていると、学習の過程で必要な教師の支援も具体的にイメージしやすくなることも期待できます。

冒頭の音楽の事例のように、端末で音を確認かめてすぐに入力できるソフトが、どの学習過程で必要になるかが見えてきます。教師が、子どもが必要なものを必要な時に提供できたのも、こうした背景があったからかもしれません。

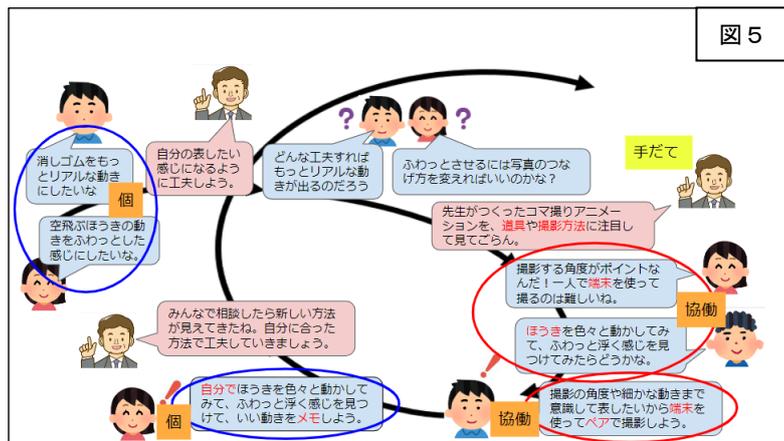


図5

## まとめ

学習者視点で捉えること、捉えた意識をもとに、子どもの授業に取り組む意識の流れを把握すること、その上で改めて支援の方向や方法を検討すること…。従来から大事にしていたが意識せずに行っていたことを、例えば(1)～(3)のように、意識的に行い見える化することで、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させる実践が進みます。

しかしここで、気を付けたいことがあります。それは、このように整理したものは、あくまでもその時点で教師が暫定的に整理したものであって、学習者の学習が展開していけば変わりうるということです。この認識がないと、結局のところ教師が一度作ったものに最後まで縛られて、教師視点からの授業づくりから脱することが難しくなってしまいます。

来年度は、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させて資質・能力の育成に資する授業改善についての事例を集め、その実践に取り組む際の教師の思考や判断にも光を当てて調査研究をしていきたいと考えています。